



2015 年 度  
研 究 奨 励  
制 度

オーストラリアのライフスタイル移住  
から見る日本の未来

18AR113 福田英里香／18AR105 堤麻里子

## ■目的地

オーストラリア、ニューサウスウェールズ州（シドニー）

## ■研究旅行の目的

グローバル化の直行は、移住時代のはじまりでもある。従来の「移住」はその多くが社会的・政治的・宗教的制圧に起因するものであったが、近年では自発的移住というかたちが一般的になってきている。現在の移住の理由は、経済上の目的やより良い教育環境を求めるものなど多岐に渡り、これは「ライフスタイル移住」と定義される。つまり、移住は「せざるを得ないもの」から「したいからするもの」へと変化したのだ。なかでも、白豪主義から多文化主義へと転換したオーストラリアは、新たな移住の地として大変人気が高い。グローバル化する世界で、国境を越える人口、人種、世代も多様化するなか、現在の日本でも「移民の受け入れ」に関心が高まっている。移民を受け入れるということは、社会問題というリスクを負うことにもなるが、オーストラリアでは経済的・社会的にも良い影響を与えているといえる。

今回の研究旅行では、オーストラリア、特に、世界各地からの「ライフスタイル移住者」の多いシドニーを中心に、その魅力について迫った。具体的には、A. グローバル水準での「移住」への価値志向とはいったい何か、B. 移住者が新たな地で掴むものは何か、C. 実際のオーストラリアの「移住者を受け入れる環境」はどうなっているのか（日本との相違点は何か）ということに焦点を当てる。博物館などの活用でオーストラリアの移民の歴史を学びつつ、実際に「いま」現地に生活している人々への聞き取り調査という、フィールドワーク調査でしか得ることのできない最新の情報の収集に努めた。

## ■期待される成果

日本は少子高齢化が進み、現在の経済規模を維持するにはオーストラリアのように移民をもっと受け入れる必要があると言われている。しかしながら、移民を受け入れるには、移民文化の民族的な偏り、社会的統合意識の希薄化、治安の悪化など、矛盾する多くの社会問題に立ち向かわなければならない。現に、ヨーロッパの多くの国ではこうした問題を解決できずに、移民問題が多発している。

本研究旅行で、オーストラリアにおけるライフスタイル移住のあり方を研究するとともに、グローバルな視点をもとに、これから日本は移民政策をどのように進めていくべきなのかという方向性の糸口を見出したい。つまり、オーストラリアの「ライフスタイル移住」を学ぶことは、これからの日本の将来を考えることにもつながるのだ。また、この「ライフスタイル移住」は比較的新しい研究分野で、日本語の文献は少ないにも関わらず、世界と日本の間、最新のグローバルな人間の流動を知るにはまさに適しているテーマといえよう。

## 福田レポート

移民政策におけるデメリットを最小限に抑え、そのメリットを最大限に活かしているオーストラリア社会について、二つのゼミ<sup>1</sup>の観点を用い、自らの足で調査することで得られた経験をもとに、さらに深い考察につなげていきたい。

### ■日程

	滞在地	行動・調査内容
2月4日(木)	移動日	福岡 → 成田 → シドニー
2月5日(金)	Chatswood	アジアのマーケット現地調査
2月6日(土)	Crows Nest	Cammeray Public School Australian Museum
2月7日(日)	Sydney 全体	Museum of Sydney Sydney Opera House Bondi Beach
2月8日(月)	North Sydney	Taronga Zoo
2月9日(火)	The Rocks	Sydney Visitor Centre at the Rocks Department of Immigration and Border Protection Chinatown
2月10日(水)	Camperdown	Sydney University
2月11日(木)	Katoomba	Blue Mounrains National Park
2月12日(金)	Sydney 全体	Town Hall Luna Park Sydney Sydney Olympic Park
2月13日(土)	移動日	シドニー → 成田 → 福岡



図1 イギリス風の小道



図2 歴史ある建物とハーバーブリッジが融合した様子

<sup>1</sup> 福田はアメリカ・太平洋文化コース、堤は比較文化コースに所属している。グローバル／ローカルな視点から研究を進めることを意識した。

## ■テーマ別訪問

### A. グローバル水準での「移住」への価値観とはいったい何か、導入

オーストラリアも日本と同じく島国であるが、移民の国である。この章では、グローバル基準で人が「動き、活動する」ということについて考えた。オーストラリアは、もともとは必要に迫られて移住する一般の人々により形成されたが、現在では多くがライフスタイル移民としてやってくるということが分かった。



図3 「移住者」の  
モニュメント

#### 1. The Rocks 地区、観光局、シドニー博物館

##### ～シドニーの基礎を形成した人々～

The Rocks 地区に到着して感じたのは、ひたすら「イギリス風」であるということである。レンガ造りの建物と情緒ある路地裏の小道からは、一瞬都会であることを忘れそうな風情が漂っていた（図1）。小さい店が狭い路地にひっそりと存在しているのが特徴的であった。ここで「ケンブリッジストリート」という名前の通りを発見し、The Rocks は 1788 年にイギリスからの移民船が到着した地域であり、シドニーの開拓はここから始まったということを確認できた。この地区

からは石造りの建造物だけではなく、少し見上げればハーバーブリッジも見られ、シドニーの歴史と現代の文化の融合を感じた（図2）。モニュメントには“*The Soldier*（軍人）”、“*The Convict*（囚人）”、“*The Settlers*（移住者）”の文字があり、目的は違うにしても 1780 年代からシドニーを形成する人口が増えていったことがうかがえた。観光局はもともと水夫の家だったコロニアル風の白い建物を利用していた。

#### 2. Cammeray Public School その①

##### ～日本人の知らない「日本人」～

シドニー日本語土曜学校の見学をした。ここでは、シドニーやその周辺で日本語を話すことができる小学1年生から中学3年生までの、日本語のレベルアップや日本文化の習得を目的とした教育が行われている。全体の生徒数は 350 人ほどであり、生徒の保護者の職業にも生徒たち自身にも本当に多様な背景がある



図4 保護者に連れられ下校する生徒

ことを知った。普段一般のオーストラリアの学校に通っている生徒もいれば、日本語学校に通う生徒もいた。ただ、共通していることも多くあった。例えば、学校自体に「両親のどちらかが日本人」や「日本国籍」などの制約はなくても、生徒の親族がもともと日本からオーストラリアに移住してきた人で、生徒自身がいわゆる「日系〇世」である場合が多かった。また、「はるか、まりな、しんのすけ、ひろき」といった具合に、生徒の多くが日

本語名だったことは印象的だった。そして、この学校は通常生徒が通っている学校に対して付加的な存在であるために、生徒の保護者が教育熱心である場合が多いということも分かった。したがって、移住した先でも母国を「捨てた」という訳ではなく、子供を通して保護者自身もアイデンティティーを保とうとしているように思われた（このことについては、テーマ B、Cammeray Public School その②にて後述する）。

生徒のほとんどが日本語よりも英語の方が堪能であるが、土曜学校では「日本語禁止」のルールが適用されていたため、教室で飛び交うのは主に日本語であった。小学1年生の月日や週の言い方の授業とテスト、小学3年生の工藤直子の詩の授業と課題、中学3年生の文法の授業と課題（グループワーク）を見学したが、どの授業も日本で使われる教材を用いており、想像以上にハイレベルな教育が展開されていた。特に、中学3年生の授業は見学に行った私たちでさえも一瞬考えてしまうような難易度の高い文法の問題に取り組んでいた。

## B. 移住者が新たな地で掴むものは何か

この章では、実際にオーストラリアへ移住した人々がどのように「考え、生活するのか」ということについて考えた。主に日本人、中国人に重点をおいて、オーストラリアにおけるアジア人の存在に迫った。オーストラリアにやって来た人々は、理由はどうであれ母国や自分のアイデンティティーを忘れることなく、むしろ大事にしながら暮らしているということを知った。

### 1. オーストラリア博物館 ～移民のモデル～

この博物館は1827年に設立されて以来、オーストラリアでは一番、世界でも有数の広さを誇っている。館内には、恐竜、動物、海洋、自然などのセクションに分かれて展示が行われていた。特にアボリジニに関するフロアは大きく、様々な趣向が凝らされており、先住民たちが漁業を中心に生き生きと生活する様子について知ることができた。人々が世界各国からの観光客を受け入れているという点で、この博物館はオーストラリアの歴史とその根底にある魅力を十分に伝えるものであった。

### 2. Chinatown、Chatswood 地区

#### ～白豪主義はどこへ(1)～

かつてオーストラリアが白豪主義であったことを忘れてしまうほど、両町ともアジア人のパワーを感じる事ができた。Chatswood 地区では料理店もアジア風であるものが多かったが、寿司屋の看板にチャイナ服を着た女性のイラストが乗っているものもあり、ここでは個々の国の文化というよりは「アジア」という大きなくくりの融合された



図5 中華服のキャラクターが印象的な寿司屋



文化が展開していることが分かった（図5）。Chinatownはその名の通り中華風な町で、店員も観光客も中国人が多く、こちらが英語で問いかけても中国語で返されることも多々あった（ただし、ほとんどの人が英語も話せるため、相手が中国人でないと分かると英語で会話してもらえた）。また、同じ商品であっても、他の地区と比べると極端に廉価で販売している店が多い印象を受けた。この理由は分



図6 旧正月を祝う装飾



図7 虎とビクトリア女王の像

らなかったが、中国人の購買基準の価値観に起因するためではないかと推測される。

3. オペラハウス、Town Hall  
～白豪主義はどこへ(2)～

時期的に中国の旧正月だったこともあり、オーストラリアを代表する建造物であるオペラハウスにも中国人観光客が多かっただけでなく、海を渡って向こう岸からも分かるほど巨大な中国風のモニュメントが展示されていた<sup>2</sup>。Town Hall 地区には QVB (Queen Victoria Building) という高級店が並ぶショッピングセンターがあった。QVB は 1898 年にビザンチンの宮殿を模して市場として建てられたもので、建物の前にはビクトリア女王の銅像もあり、西洋風の城のような外見だった。驚くことに QVB は、(旧正月を祝うために) 内装に中国風の提灯を展示しているだけにとどまらず、ビクトリア女王の銅像よりも圧倒的に目立つ、「四季平安」という文字を持った蛍光色の虎のモニュメントを外に設置していた（図7）。初めて見た時は一瞬自分の目を疑うほど違和感があったが、なるほどこれがオーストラリア流の文化融合かと納得させられた。それと同時に、シドニーで中華系の移民たちがこの地で掴み取った自分たちの地位というものを肌で感じる事ができた。



図8 アイスクリーム屋が寿司を販売

<sup>2</sup> 表紙写真参照、三体のカラフルなサル（猿）のモニュメントがあるのが分かる。

#### 4. Cammeray Public School その② ～日本へ移民させるのが目的ではない～

この学校訪問の前まで、この学校が担う役目は将来日本に移ったり、何かしらの形で日本に関係する仕事を選択したりすることを目指した生徒たちへの教育であると考えていたが、それは全くの検討違いであったと知った。生徒たちの多くがそのままオーストラリアに永住するつもりであり、これまでの卒業生もそのようであった。ではなぜ休日を返上し、普段使わない漢字を無理矢理覚えようとするのか。その理由は、生徒たちとその保護者が「自分のアイデンティティーを保つ」ことを希望するためだという。学校の先生と生徒へのインタビューにより、これほどライフスタイル移住が進む現在だからこそ、自分のルーツを見失わないようにするために、日本文化に触れていることが大切なのだと知らされた。

#### C. 移住者を受け入れる環境・日本との相違点、結論

様々な観点から、オーストラリアの環境は日本と大きく違うことが分かった。その上で、オーストラリア（シドニー）が多くの人々のライフスタイル移住の地となるのはなぜかを考えた。オーストラリアには、自国の文化を主張しつつも他者をしっかり受け入れるだけの器の大きさがあることが分かった。また、ここでは「ライフスタイル移住」には欠かせない、オーストラリアの魅力について述べるが、現代の移住が観光と大きく関わっているということを見出すこともできた。

#### 1. Bondi Beach、ルナ・パーク、シドニー・オリンピック・パーク ～シドニーの基礎～

この3つの場所に共通することは、もともとの「シドニーらしさ」が感じられる場所であるということであった。Bondi Beach にいるのは8～9割が白人の若者で、店も白人が経営している割合が他の地区よりも高かった。これは、白人の「小麦色の肌が理想」という考え方に起因するものではないかと推測できるかもしれない。また、予想に反して家族連れはほとんどおらず、友達か恋人同士で来ている場合が多かった。1人で来



図9 Bondi Beach

ていた女性も何人もいたが、特に気にしないしされないということから、日本と全く違った環境だと思った。



図10 ルナ・パークからの景色

ルナ・パークは1935年に開業して以来、改装を繰り返しながら、2015年に80周年を迎えた。アトラクションに1904年製のオルガンが使用されているなど、歴史を感じられるだけでなく、パークからはオペラハウスとハーバー・ブリッジが臨め、まさにシドニーの根底にある文化を同時に感じることもできた（図10）。

オリンピック・パークは2000年に開催されたシドニーオリンピックのために設立された。電車にはパークに行くための専用のプラットフォームがあった。パークの中にはアクアティック・センターやスタジアムオーストラリア、活躍したオーストラリア人選手のモニュメントもあり、かつてここが世界中の人から注目されていた場所であったことを物語っていた（図11）。



図11 スタジアムオーストラリアとモニュメント

## 2. タロンガ動物園 ～オーストラリアが主張するもの～



図12 キリンの背後にオペラハウスが見える

このテーマで訪問先に設定した当初、「なぜ動物園を選んだのか」という質問を多く受けたが、その理由はオーストラリア最大規模を誇る動物園に行くことで「オーストラリアが主張するものを知りたいから」である。日本でいうオーストラリアの動物のイメージといえば、かわいいコアラかカンガルーであろう。

ここに来て分かったのは、たしかにコアラやカンガルーも存在していたが、あくまでもオーストラリアを代表する動物のひとつに過ぎないということである。それに加え、「かわいい動物たち」というより、どちらかといえば両方とも野性的な印象を強く受けた。むしろカモノハシやオーストラリア固有のタスマンアンデビルなどの方が展示が派手で、丁寧に飼育されている様子であった。さらに、キリンのブースは海を挟んで向こう

側にオペラハウスとハーバーブリッジが臨める最も良い場所に位置していた。キリンはタロンガ動物園の公式パンフレットの表紙も独占しており、私たちのいわゆる「オーストラリアの動物」のイメージとは大きく違うことに衝撃を受けた（図12）。他にも、オーストラリアを代表する動物としてクロコダイルやワライカワセミ、エミューにも焦点を当てた展示の仕方であることが分かった。

そして、ここでもう一つ気付かされるのは、オーストラリアには「わざわざ動物園に観光しにくる人がいる」ということである。わざわざ日本の動物園を旅程に入れる人はそう多くないであろうが、ここは違う。まして、タロンガ動物園はシドニー中心部からは少し離れたノース・シドニーという地域にあり、時間をかけて行かなければならないにも関わらず、行きも帰りも、平日でもフェリーは満席であった。「ライフスタイル移住」という観点からすると、こういったオーストラリアのひとつひとつの魅力も、生活環境という点で移住する要因のひとつになっていると言ってよいだろう。



ここには他で見られないであろう、忘れられない展示がもうひとつあった。生きたゴキブリの展示だ(図13)。特殊な動物園か博物館でない限り、日本では考えられない展示だが、これも「すべてを受け入れ、ありのままを見せる」オーストラリア流の考え方なのかと衝撃を受けた。



図13 台所風な展示にゴキブリ

### 3. ブルー・マウンテンズ国立公園 ～隣の世界遺産～

同じニュー・サウス・ウェールズ州にあり、シドニーから電車で片道3時間ほどの場所に、スリー・シスターズという岩で有名なブルー・マウンテンズ国立公園があった。都会から近く交通の便も良い場所に自然を堪能できる世界遺産があり、シドニー中心部から多くのツアーが紹介されていた。先述の通り中国人観光客の団体はもちろん多かったが、日本人にも人気なようで、日本語の堪能なツアーガイドが率いる団体がいくつも見受けられた。需要に合った供給(日本語、中国語ガイドなど)がしっかり実現されていることから、や



図14 多くの中国人ツアー客 はりここでもオーストラリアはアジア人の(観光)力を上手くコントロールしているという印象を受けた(図14)。また、これがオーストラリアの調和力であると実感した。もちろん、自然遺産そのものもオーストラリアの持つ魅力であった。

### 4. 公共交通機関について ～ぬくもりある場所～

公共交通機関では、オーストラリアの穏やかな風土をよく感じられた。シドニーに到着した日には空港でも地下鉄でも道に迷ったが、その度に現地のオーストラリアの人が助けの手を差し伸べてくれた。日本人が世界一親切だとなぜか思い込んでいた私には、とても衝撃的であった。しかも、これは係員や駅員といった業務に就いている人ばかりでなく、一般の人であっても「困っている人を放っておかない」のである。ライフスタイル移住をするという視点で考えると、その土地柄というのは重要な要因であると考え。

### 5. Cammeray Public School その③ ～日本人の知らない「日本人」～

ある女性の先生にインタビューすると、人々がオーストラリアに移住したがる本当の理由が見えてきた。オーストラリアにライフスタイル移住を決めたきっかけを聞くと、「オーストラリアでは、独身女性がいても、『いつ結婚するのか』などと咎められることはない。それに、気候的にも暮らしやすい。皆がお互いを受け入れて国が発展してきたから、基本的に人が優しい。」と返された。なかなか移民政策が上手くいかない日本については、「日本が本当の意味で移民を受け入れるようにするには多少の神経質さを忘れるべきかもしれない。」とも言われた。つまり、オーストラリアには自然風土的な条件の良さに加え、人々

が当たり前で他者を受け入れる環境があるということである。この学校では基本的に国語（日本語）だけを教えるが、教員は何かしらの日本の教員免許を持っていることが条件なので、教員同士の取得免許の教科も違えば、土曜以外でやっている職業も多様であったが、お互いを尊敬しあっているとのことだった。

これは、学校の授業でも見て取れた。この学校の生徒たちは1人の例外もなく皆積極的に授業に参加し、発言をしていた。もちろん中学3年生であろうと、その答えが間違っていようと自分の意見は主張する。その代わりに、意見の違う人の話もよく聞くし、理解しようとしていた。日本に置き換えて考えてみると、中学3年生の多くが、たとえ真面目な生徒でも、他者からの反応を気にするあまり、授業中に積極的に手を挙げようとはしない。どちらの文化が優れている／劣っているという訳ではないが、オーストラリアの方が、より他者を「受け入れる」文化であるということかもしれない。

### ■考察・まとめ

この研究旅行へ行って分かったのは、残念ながら日本は、単にオーストラリアを真似した移民政策をしても上手くいかないであろう、ということだ。オーストラリアと日本との違いは様々あるが、決定的なのはテーマCで詳しく扱った「寛容の文化」であるか否かという点である。いわゆる、「のんびりした空気が流れている」というのはこのことである。日本は単一民族の国



図15 都市の中心にある歴史的建造物

家でないにしても、どうしても「外国人」は「お客様」として接してしまいがちである。言い換えれば、「自分と違った価値観の人々」に対して過剰に意識しすぎてしまう、ということだ。その代わりに、まず、日本には長期的な移住者ではなく短期移民を増やせばよいのではないか、と気付いた。短期移民というのは、ライフスタイル移住の極短期版と言ってもよい。つまり、観光で滞在する外国人を増やすことである。



図16 オペラハウスのショップ  
扉に「福」の文字

そもそも日本が移民を受け入れを検討している大きな理由は、人口減少で少子高齢化している日本の国力を維持し、増大するためだ。この場合の移民は主に観光を含まない長期の滞在者を意味しているが、ここに観光客（短期移民）を当てはめればよい。

つまり、オーストラリアのライフスタイル移民の代わりに、日本は観光客という名の極短期移民を増加させるべきだと考える。「移住させるために苦手な分野（寛容文化）を克服する」よりも未発展な「得意な分野（観光）」を発展させる方が楽で

確実だからである。実は、日本には、一般に観光で人を誘致するのに必要と言われる「気候」「自然」「文化」「食事」という4条件が揃っているにも関わらず、他の先進国の諸国と比べて年間の観光客数、観光収入が極端に少ないことが分かっている。したがって、まずは2020年の東京オリンピックに向けて観光産業を活性化させ、開催時にそれを上手くアピールできれば将来的には日本の（長期）ライフスタイル移民誘致も可能になるのではないかと思う。



図17 高級ブランド店の扉にも「福」の文字

ただ、ここには注意すべき点もある。研究旅行から帰って、大学生を中心に20代の日本人男女約140人に「外国人観光客に誇れる日本の文化は何だと思うか」というアンケート調査をしたところ、「おもてなしの心」「礼儀」「治安の良さ」という回答が約80%を占めた。たしかに、これらが日本の魅力であることは間違いないが、これを目指して観光に来る外国人は少ないと思う。また、中には「落とした財布がほぼ確実に戻ってくる」という回答もあった。これは、オリンピック

誘致のスピーチの中でも言われた内容であるが、警視庁のデータによると、現金では届け出があった額の約40%しか戻ってこないという。

このように、将来的に長期移民を増やすことを目標にまず日本の観光産業を発展させるにしても、今よりもっと私たちが現実を捉え、日本の本当の魅力に気づき、正しくアピールしていくことが大事だと考える。

## ■研究旅行を終えて、感想

今回の研究旅行に行く前は、漠然と「これから日本には移民の力が必要で、その政策にはオーストラリアのライフスタイル移民を真似すればよい」と考えていたが、その考えが甘かったことに気付いた。オーストラリアがライフスタイル移民の誘致という点で成功しているのは、(人々の考え方の面で)オーストラリアにしかない独自の文化という基礎があってこそだったのだ。しかし、考察で述べたように、日本は日本なりのやり方で移民を増やすことは可能なのだ。あいまいな「おもてなし」という言葉でごまかすのではなく、オーストラリアのように「移民や観光客を受け入れる環境・魅力がある」ということを証明するだけの具体例を用意しなければならない。この経験を通して、自分自身も国内外にもっと日本の観光的な魅力を発信していけるようになりたいと強く考えるようになった。

## ■参考文献

長友淳『日本社会を「逃れる」—オーストラリアのライフスタイル移住』彩流社、2013年。

デービッド・アトキンソン『新・観光立国論』東洋経済新報社、2015年。川上郁雄『移民の子どもの言語教育』オセアニア出版社、2012年。ジークリット・ルヒテンベルク『移民・教育・社会変動』明石書店、2008年。

早稲田大学オーストラリア研究所『オーストラリア研究 多文化社会日本への提言』オセアニア出版社、2009年。

## ライフスタイル移住から見る日本の未来 ～観光産業からの一考察～

日本は移民政策をどのように進めていくべきかというテーマを考えるうえでシドニーを現地調査する際に

- 1 移住の価値志向の変化
  - 2 移住者が新たな地でつかむもの
  - 3 オーストラリアの受け入れ制度、進んでいること
- を探り出し、テーマへとつなげたい。



撮影・堤

### ○はじめに

今回の研究を行ううえで私たちが大変お世話になった、長友淳先生の著した「アジアから見る、考える」などの文献によると、移住を決意する人の多くが事前に観光や仕事でこの地を訪れている。彼らは訪れた地でいったい何を期待し、実際はどのような感情を得て帰路につき、さらにはどのようにその地への移住を決意するのだろうか。今回はますます重要視される観光産業を調査し、観光客が捉え得る感情を考察しながらシドニーの街を巡った。

2月6日に訪問させてもらった Cammeray Public School 日本語土曜学校<sup>3</sup>では、授業見学に加え三年生担当の中村先生、そして今回私たちの対応をしてくださった阿部先生にお話を伺うことができた。どうして多くの移住者がシドニーを選んでやってくると思いますか、という問いに中村先生は、住みやすく、過ごしやすいからだと言われた。それは主に気候、環境、教育、仕事、そして多民族国家が故に人々がみな誰にでも優しく、アイデンティティーが重要とされるといった点に表れるようだ。本報告書では、これに基づいて話を進めたいと思う。

### ○気候・環境

シドニーを訪れる観光客は大都市と併存する自然や、少し足を延ばせば雄大で幻想的な景色と出会えることに魅了されるだろう。都市中心部にも緑あふれる大きな公園や噴水、そして近郊には大規模な動物園がある。ここにも、日本の動物園とは異なる部分がたくさんあった。つくりや規模の大きさも印象的であるが、コアラ、カンガルー、タスマニアンデビルなどのオーストラリア固有種だけではなく、ワニやヘビといった爬虫類も多く展示されており、自然の中で生きる彼らの姿を間近で観察することができる。さらに足を延ば

<sup>3</sup> ニューサウスウェールズ州で1993年にボランティア父母により設立された日本語のレベルアップ、日本文化の習得を目的とした学校



すと有名な観光地、ブルー・マウンテンズ<sup>4</sup>を訪れここにある圧巻な大自然の山々を見渡すこと、先住民族アボリジニの伝説を学ぶことが可能だ。日頃ストレス社会で生きる観光客は都市部にいながらこれらの自然を満喫し、そののびのびとしてある意味優雅な生活に魅了されるのではないかと考えられた。

### ○教育

私たちが土曜学校で授業を見学してまず感じたことは、どのクラスもグループワークが多いということだ。むしろ見学した 3 クラス全てがグループワークを行っており、そこには生徒たちに自力で意欲的な参加、調査、考察、学習、理解をできる人間に育ってほしいという考えがあるようだ。実際に見学してみると、生徒たちは失敗を恐れたり恥ずかしがったりせず発言、意見する場面が多く見受けられた。間違わないことはないが、間違えても赤面してしまうようなクラスの雰囲気は全くない。確かに大人になった時に「人に合わせる」「他人に任せる」といった消極的な態度ではなく、自発的な行動を進んでできるようになるだろう。彼らは将来、自分のやりたい仕事、なりたい職業に就くという。この教育方針は、ライフスタイルが充実した国だからこそ最大限に生かされるものであるといえよう。

### ○仕事

ところで、オーストラリアには女性は何歳までに結婚して家庭を築くべきだといった固執した考えがなく、人の目を気にして生きるような習慣がない。これに関連して、シドニー近郊の Bondi Beach を訪れた時、そのことを改めて考えさせられた。本来は、家族における父親の育児への協力的な姿を調査することが目的だったが、ここで目立っていたのは一人でビーチに寝転がる多くの女性の姿である。ここから考えられることは一人一人が堂々としていること、「一人でいる」ということに対してマ



イナスイメーajがないことなどがある。多くの女性が周りの目ばかりを気にして、そして女性に限らず多くの人が 撮影・堤

「集団」で行動することに執着しているように感じられる日本と比較してみると、「自分らしく生きたい」「周囲の観念にとらわれず働きたい」と考えている女性にとって、社会で堂々、のびのびと生活している彼女らの姿は大変魅力的に感じられるだろう。

シドニーで Chatswood や CrowsNest<sup>5</sup>を歩いていて気づいたことがある。バーや居酒屋を除いて、飲食店を含めた多くの店がまだ明るい 17 時ごろには閉店していた。客としては不便かもしれないが、それを分かったうえで生活をすれば、それは就労者のことをよく考えられている「働きやすい環境」であることがここから顕著にうかがえる。

<sup>4</sup> 100 万ヘクタールの巨木の森林、砂岩の絶壁、溪谷、原生林である。

<sup>5</sup> それぞれ中国系、日本人の人口集中がみられる地区



## ○人間性

そしてこの国の人々についてだが、たった 8 日間の滞在でも感じられるほど彼らは温かくおおらかである。個人的にオーストラリアについてどのような国だろうかと期待する気持ちと、アジア人である私たちは多くの差別を受けるのではなかろうかという不安、心配の気持ちがあったのだが後者についてはそのようなことは一切なかった。シドニーでは肌の色が異なっても特別目立つことがなく、身を以て彼らの寛容で優しい性格・気質を知ることができた。私は彼らの人間性に魅了された日本人の一人だろう。日本と比較してみると気軽に他人の荷物を持つ、笑顔で挨拶をするなど普段では考えられないことが多かった。それは多文化主義国家であり、アイデンティティーを大事にする国であるゆえにもちうる特質だと考えられる。シドニーの土曜学校は、永住<sup>6</sup>する日本人がアイデンティティーを失わないためにもずっと日本語、日本文化に触れていられる場所として大きな意味を持つ。一人一人が個人のアイデンティティーを大切にできる場所なのである。

## ○まとめ

今回私たちは互いのゼミの特性を生かし、グローバルとローカルの視点からこのテーマを探ることを試みた。私は移住の価値志向は変わる一方であると考え。それはグローバル化の進行によって人、モノ、メディアその他の流動が起これ、このことが移住者の移住を決断する要因の一つになっているともいえる。特にメディアの流通が海外を訪れるきっかけにもなりうるのは、魅了されたオーストラリアと母国両国への帰属意識を持つことが可能になるからである。観光はこのグローバル化の一つの側面であり、現地のローカルな部分に触れられる機会である。そして上述してきたように、移住が期待される観光客はオーストラリアにおいて住みやすさ、過ごしやすさ、その一つとしてライフスタイルの多様性を経験、発見することが可能だ。これらのことから、日本が移民政策を仮に実施していく際、観光客を意識した観光産業の在り方は重要な点になってくるのではないだろうか。現地調査して考えたことは、観光して「ここに住みたい」と観光客が思わなければライフスタイル移住は始まらないということだ。そのうえで大人にとって就労、子供の教育は重視される点であろう。これらは現地で私たちが「進んでいる制度」として捉えられたものの一つだ。日本ではこれらはどうだろうかと疑問に思う。観光客を魅了することができるように遅れている制度を改善すること、そして反対に進んでいる制度、たとえば技術の進歩による便利な社会生活などは前面に押し出し、アピールしていく観光産業を実施していくべきではなかろうか。

## ○参考文献

『アジアから観る、考える』片山隆裕(編) ナカニシヤ出版 2013/4/15

『日本社会を逃れる』長友淳(著) 彩流社 2013/4/1

---

<sup>6</sup> 三世世代にもなると、出生国の言語しか喋られないことが多くなるため